

対象項に関わる「に」「を」の誤用  
—中国語を母語とする日本語学習者を対象に—

関西学院大学大学院 高山弘子

1. 問題の所在と研究の目的

- 中国語を母語とする日本語学習者に見られる、<対象>項を表す格助詞「に」「を」間の誤用
- (1) もちろん、外来語を使うか否か、一般的には人の判断に従うことであって、外来語のイメージを活用することを一概に否定する必要がないと思うが、人々の言語生活への影響を考えた上で、言葉遣い<\*に→を><sup>1</sup>慎重に考え、必要に応じて注釈や言い換えを備えるなどの配慮が必要ではないかと思う。(中国 M3/学習歴 6 年か 6 年以上/修論)
  - (2) 商家で生まれ育った布美枝さんが漫画家としての水木茂さんとの運命的な縁談を持ちかけられた。すぐ結婚<\*に→を>決断した。(中国 M1/学習歴 4 年/滞日 0/感想文)
  - (3) 一人の女性として、私は関沢教授の理論、特に「円」についての見解が非常に問題の急所<\*に→を>ついていると思います。これは日本の現状だといいますが、実は中国でも同様です。(中国 M1/学習歴 4 年/滞日 0)
  - (4) 私たちは病気にかかった時は、休みを取ることができる、でも先生たちは病気<\*を→に>かかっても我慢して、仕事を続ける。(学部 3 年生/学習歴 5 年/滞日 0/感想文)
  - (5) また、日本の女性は、子供ができると仕事をやめ、家で育児<\*を→に>専念する人が多く、会社側にとっても、それを懸念材料の一つとして、女性を雇用することを控える傾向があるようだ。(中国 M1/学習歴 4 年/滞日 0/感想文)
  - (6) しかし、現段階において、軍隊や警察などによる暴力行使の正当性は認められているが、国の管理<\*を→に>携わる政府機関による職権暴力の乱用は避けられない問題として目立っている。(中国 M3/学習歴 6 年か 6 年以上/修論)

---

<sup>1</sup> ここでの「<\*に→を>」は、矢印の前の格助詞「に」が誤用で、矢印の後ろの格助詞「を」が正用であること、つまり格助詞が「を」であるべきところに「に」が選択されたことによる誤用であることを表している。なお、「\*」の記号は筆者が誤用であることが分かりやすいように追加したものである。

- 『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コンコーダンスー2015』 Ver.3 における格助詞間の誤用件数

表 1

誤用種別	内訳				合計件数
	パターン 1	誤用件数	パターン 2	誤用件数	
「が」「を」	*が→を	476	*を→が	471	947
「に」「を」	*に→を	278	*を→に	547	825
「に」「で」	*に→で	516	*で→に	229	745
「に」「が」	*に→が	90	*が→に	152	242
「に」「と」	*に→と	114	*と→に	47	161

- 『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コンコーダンスー2015』 Ver.3 における<対象>項、<着点>項に伴う「に」「を」間の誤用件数と割合

表 2

深層格	誤用件数	割合
<対象>	298	36.1%
<着点>	189	22.9%

- <対象>項における「に」「を」間の誤用の要因に関する先行研究
- 1) 母語の負の転移
    - a. 「\*を→に」の誤用：目的語の母語の負の転移（杉本 1997：33、張 2001：57、市川 2010：784-785 など）
    - b. 「\*に→を」の誤用：補語（「成／为／成为」「到」など）の母語の負の転移（張 2008：209-210、215）
    - c. 「\*に→を」の誤用：介詞（「向」「给」「对」など）の母語の負の転移（張 2008：209-211）
  - 2) 過剰般化
    - d. 「\*に→を」の誤用：名詞の性質に関わる過剰般化（杉本 1997：38-39、市川 2010：536）
    - e. 「\*に→を」の誤用：方向性に関わる過剰般化（杉本 1997：39、蘇・吉本 2006：69）
    - f. 「\*に→を」の誤用：ニ格のイメージに関わる過剰般化（杉村 2010：150）
- 先行研究の問題点
- ①<認識の対象>の「に」の誤用に関する指摘がない。
  - ②補語の母語の負の転移に起因しない<変化の対象>の「に」の誤用に関する指摘が

ない。

③母語の負の転移も関与しているが、それ以外の要因も考えられる点についての指摘がない。

⇒項が生起し、格助詞が「に」か「を」が伴う際に見られる誤用については、一般化されているとは言いがたく、なぜそのような誤用が生じているのかが十分に説明できない、という問題点がある。

➤ 本研究の目的

誤用の頻度の高さから、まずは二項動詞が伴う<対象>項に見られる誤用に的を絞り、中国語を母語とする日本語学習者の格助詞「に」「を」に見られる誤用のうち、これまでに指摘がない誤用の要因、母語の負の転移以外にも関与していると思われるその他の要因について明らかにすることを目的としている。

2. 研究対象と使用データ

➤ 研究対象

中国語を母語とする日本語学習者（以降、「学習者」と示す）が、二項動詞が求める項において、「に」または「を」を選択することで誤用と認定されるもの。特に、これまでに指摘がない誤用の要因、母語の負の転移以外が関与していると思われるもの。

➤ 使用データ

『YUK タグ付き中国語母語話者日本語学習者作文コンコーダンスー2015』Ver.3（以下、「YUK コーパス」と示す）

3.<対象>項に伴う「に」「を」の誤用の要因

3.1 <認識の対象>に見られる誤用

➤ 用例（「\*に→を」の誤用）

(7) 西洋の罪の文化と違って、恥の文化に育てられた日本人は自分の行動の是非を判断する標準は、社会道德の規則もしくは法律の規定よりも、他人が自分の行い<\*に→を>どう考えているのかという他人の態度だと思っている。(学部 4 年生/学習歴 3 年半/滞日 1 年/卒論)

(8) 夏休みには、日本語の語学実習がありますので、日系企業に実習に行きたいと思っています。しかし、日系企業<\*に→を>あまり詳しく知りません。(学部 3 年生/学習歴 2 年半/メール)

(9) この定義を見て、私はそういうこと<\*に→を>感じている。(学部生 3 年/学習歴 2 年半/滞日 0/作文)

(10) このようなことは毎日起っていて、だんだん自分の気の弱さ<\*に→を>悟った。(8級試験)

(11) 両国の国民は文化で平和を守れること<\*に→を>信じています。(学部2年生/学習歴1年半/滞日0年/作文)

➤ 分析

◇ 母語の負の転移の関与

- ・ (7) (8) → 1) c.の母語の負の転移
- ・ (9) (10) → 1) b.の母語の負の転移

◇ その他の可能性

- ・ 認識動詞=状態動詞
- ・ [結果状態] を含意
- ・ [結果状態] に着目→過剰般化により、<変化の結果>の「に」を選択。  
⇒日本語中国語で結果の捉え方が違う。

3.2 <変化の対象>に見られる誤用

➤ 用例(「\*に→を」「\*を→に」の誤用)

(12) 私たちは病気にかかった時は、休みを取ることができる、でも先生たちは病気<\*を→に>かかっても我慢して、仕事を続ける。(用例(4)再掲)

(13) 卒業してから、理想的な仕事<\*に→を>見つけて、仕事をしながら、勉強し続けます。(8級試験)

(14) もちろん、自分の家庭<\*に→を>作りたい。(8級試験)<sup>2</sup>

(15) 今男子が理・工・医・社会科学系に進む比率が高く、女子が家政・文学系に進む比率が高いことは、将来の職業の格差<\*に→を>決定してしまうことになります。  
(中国M1/学習歴4年/滞日0/感想文)

(16) このシーンにより、人間が自然<\*に→を>汚染したと分かったが、現実ではこの病気を治すお風呂屋がないから、人間自身が環境を守らなければならないのだと思った。(学部3年生/学習歴2年半/滞日0/感想文)

➤ 分析

◇ 母語の負の転移の関与

- ・ (12) → 1) a.の母語の負の転移
- ・ (13) → 1) b.の母語の負の転移

---

<sup>2</sup> 「8級試験」とは、中国で、日本語専攻の4年生を対象に行われている試験のことである。なお、受験生の性別など、詳細な情報については不明である。

◇ その他の可能性

- ・動作の結果、ある状態の結果が生じる。
- ・[結果状態]に着目→過剰般化により、<変化の結果>の「に」を選択。  
⇒日本語中国語で結果の捉え方が違う。

3.3 <感情の対象>に見られる誤用

➤ 用例（「\*を→に」の誤用）

(17) そのような言葉を目にしたとき、山口さんの勇氣<\*を→に>感心し、彼女の考え方を十分に支持した。（中国 M1／学習歴 4 年／滞日 0／感想文）

(18) 小学生の時、日本の漫画はすごいと思いました。例えば、テレビでちびまるこを見て、その想像力<\*を→に>驚きました。（学部 3 年生／学習歴 2 年／滞日 0／スピーチ）

➤ 分析

◇ 母語の負の転移の関与

- ・(17) (18) → 1) a.の母語の負の転移

◇ その他の可能性

【学習者の用例】

(19) 小学生の時、日本の漫画はすごいと思いました。例えば、テレビでちびまるこを見て、その想像力<\*を→に>驚きました。（用例 (18) 再掲）

(20) また、日本語で「九」が「苦」と同じ発音であり、健康長寿でいたい、苦難<\*を→に>喘ぎたくない、死亡したくない日本人から嫌われる。（学部 4 年生／学習歴 3 年半／滞日 0／卒論）

(21) もしかすると、本当は行きたいのだが、新しいものに興味を持っている自分<\*を→に>照れ、このような言い方をしていると思われる。（8 級試験）

(22) 楼を上がるのは別に何でもないが、人目<\*に→を>恐れて、このように行動するのは疑われる。（学部 4 年生／学習歴 3 年半／滞日 0／卒論）

【日本語母語話者の用例】

(23) 錦三のある交差点。深夜まで客引きをしていた男ら約 15 人が、1 日午前 0 時になると全員、姿を消した。男性会社員 (35) は「全然声を掛けられない」と様変わりを驚いた。（毎日 2013.06.01）

(24) 鈇岩への岐路を経て、急な登山道をあえぎ、展望台に着く。南アルプス、真近くに茅ヶ岳、曲り岳を見る。（毎日 1999.12.14）

(25) 「コツコツやるのが性に合っただけ。でも、ありがたいですね」と受章を照れる。「これまで通り、日常生活の一部として点訳奉仕を続けていくだけです」(毎日 2003.11.02)

(26) (01年エドモントン)は)何も分からずに出てメダルを取った感じ。だから(その後) 高まった世間の期待に恐れた。そんな器じゃないと思ったが、周囲はそういう水準に戻してくれない。(朝日 2006.04.21)

⇒日本語母語話者とは、[原因][心理状態]のどちらに着目し、それによって「に」か「を」を選択するという点においてずれがある。

### 3.4 <態度の対象>に見られる誤用

#### ➤ 用例(「\*を→に」の誤用)

(27) 実は、私は中国から来た鳩だ。非常に自由で新しい生活<\*を→に>憧れている。(中国 M3/学習歴 6年か6年半以上/修論)

(28) 研究する途中には、困難がないというのは嘘で、本当は想像以上の辛さ<\*を→に>耐えなければならない。(中国 M1/学習歴 4年/滞日 0/感想文)

#### ➤ 分析

##### ◇ 母語の負の転移の関与

- ・ (27) (28) → 1) a.の母語の負の転移

##### ◇ その他の可能性

##### 【学習者の用例】

(29) 幼い時、私は科学者、医者など<\*を→に>憧れた。(8級試験)

(30) 人々は豊かな生活を楽しみながら、大きなプレッシャー<\*を→に>耐えている。(学部4年生/学習歴3年半/滞日0/卒論)

##### 【日本語母語話者の用例】

(31) 先週の歌は生も死も超越した悟りの心境をあこがれる一首でしたが、では、どうすれば悟りの世界へいけるのかとこの歌は悩んでいます。(朝日 2014.02.01)

(32) 田辺市出身。身長 160センチ、体重 58キロ。高速ドリブルが持ち味で、アルゼンチン代表の FW リオネル・メッシをあこがれる。小柄の似た体格から地元テレビ局も「北高のメッシ」と評した。(毎日 2010.03.03)

(33) 追い打ちをかけたのは、就任わずか二十七日目にして久世金融再生委員長の不祥事の発覚と更迭。粗雑な組閣人事で自民党の体質が問われた。こんな内閣で、こんな首相で大丈夫かという疑念と不安に、国民は歯がゆい、情けない思いを耐え

ている。(朝日 2000.08.16)

⇒日本語母語話者とは、項の性質、事態の継続性によって「に」か「を」を選択するという点においてずれがある。

#### 4.まとめ

##### ➤ 結論

中国語を母語とする日本語学習者の二項動詞が伴う<対象>項に見られる、格助詞「に」「を」の誤用のうち、これまでに指摘がない誤用の要因、母語の負の転移以外が関与していると思われるものについて考察した。明らかになった点は以下の通りである。

- ①<認識の対象>の「に」でも誤用が見られ、母語の負の転移以外に、[結果状態]の捉え方の違いにより過剰般化が起こり、「に」を選択する誤用が見られる。
- ②<変化の対象>に伴う「に」のうち、補語に関わる母語の負の転移に関わらない「に」の誤用でも、[結果状態]の捉え方の違いにより過剰般化が起こり、「に」を選択する誤用が見られる。
- ③従来、母語の負の転移に起因するとされている誤用の中には、日本語母語話者が着眼点が置かれるのが[原因]か[心理状態]かや、項の性質、事態の継続性によって、格助詞を選択するのとは異なるルールを適用することにより、「に」「を」の誤用が生じていると考えられるものもある。

##### ➤ 今後の課題

以下については明らかにできていないため、今後の課題としたい。

- ・[結果状態]に関わる捉え方の違いの詳細
- ・[原因]と[心理状態]の捉え方、項の性質、事態の継続性に関わるルールの詳細

#### 参考文献

- 相原茂・楊凱榮 (1990)「自動詞と他動詞—中国語と日本語—」『国文学解釈と鑑賞』55-1, pp.123-128.
- 荒川清秀 (1986)「中国語動詞にみられるいくつかのカテゴリー」『愛知大学文学論叢』67, pp.368-344.
- 荒川清秀 (2012)「知ルと“知道”」『日中言語研究と日本語教育』5, pp.9-19.
- 市川保子 (2010)『日本語誤用辞典—外国人学習者の誤用から学ぶ日本語の意味用法と指導のポイント』スリーエーネットワーク.
- 今井洋子 (2000)「上級学習者における格助詞「に」「を」の習得」—「精神的活動動詞」と共起する名詞の格という観点から—『日本語教育』105, pp.51-60.
- 奥田靖雄 (1983a)「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会 (編)『日本語文法・

- 連語論（資料編）』 pp.21-149, むぎ書房.
- 奥田靖雄（1983b）「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会（編）『日本語文法・連語論（資料編）』 pp.151-279, むぎ書房.
- 奥田靖雄（1983c）「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」言語学研究会（編）『日本語文法・連語論（資料編）』 pp.281-323, むぎ書房.
- 影山太郎（1996）『動詞意味論』くろしお出版.
- 影山太郎（2002）「動詞意味論を超えて」『月刊言語』 31-12, pp.22-29.
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテクストー現代日本語の時間の表現』ひつじ書房.
- 久保田美子（1993）「第 2 言語としての日本語の縦断的習得研究一格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について一」『日本語教育』 82 号, pp.72-85. ※英語母語話者が対象
- 国立国語研究所（2001）『現代語複合辞用例集』.
- 蘇雅玲・吉本啓（2006）「日本語学習者における格助詞「を」「に」の習得過程の研究」『東北大学高等教育開発推進センター紀要』 1, pp.63-76.
- 杉村泰（2010）「コーパスから見た中国人日本語学習者の格助詞に関する問題点について」『言語文化研究叢書』 9, pp.137-152.
- 杉本妙子（1997）「格助詞「を」をめぐる誤用:分類と分析」『茨城大学人文学部紀要. コミュニケーション学科論集』 1, pp.31-51.
- 砂川有里子（1984）「ニとカラの使い分けと動詞の意味構造について」『日本語・日本文化』, pp.12 71-87.
- 高山弘子（2013）「中国語を母語とする日本語学習者による格助詞「に」「を」の混同の分析ー母語話者での揺れからの分類結果における傾向性と要因一」『北研学刊』 9, pp.61-75.
- 張善実（2008）「漢語動詞のニ格構文に関する誤用調査ー中国人日本語学習者を対象に一」『言葉と文化』 9, pp. 205-220.
- 張麟声（2001）『日本語教育のための誤用分析ー中国語話者の母語干渉 20 例』スリーエーネットワーク.
- 寺村秀夫（1982）『日本語のシンタクスと意味 I』くろしお出版 .
- 仁田義雄（1973）「動詞の格支配」『国語学研究』 12, pp.64-54. (仁田義雄（2010a）「動詞の格支配」『語彙論的統語論の観点から』 pp.51-65 に再録, ひつじ書房. 本研究では再録されたものを使用)
- 仁田義雄（1986）「格体制と動詞のタイプ」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究・7』 pp.107-213, 情報処理振興事業協会. (仁田義雄（2010c）「格体制からした動詞のタイプ」『語彙論的統語論の観点から』 pp.189-335 に再録, ひつじ書房. 本研究では再録されたものを使用)
- 仁田義雄（代表）（2007）『現代日本語文法 3 第 5 部アスペクト 第 6 部テンス 第 7 部

- 肯否』日本語記述文法研究会（編），くろしお出版。
- 仁田義雄（代表）（2009）『現代日本語文法 2 第 3 部格と構文 第 4 部ヴォイス』日本語記述文法研究会（編），くろしお出版。
- 仁田義雄（代表）（2010）『現代日本語文法 1 第 1 部総論 第 2 部形態論』日本語記述文法研究会（編），くろしお出版。
- 日本語文法学会（2014）『日本語文法事典』大修館書店。
- 野田尚史（2001）「学習者独自の文法の背景」野田尚史・迫田久美子・渋谷勝己・小林典子『日本語学習者の文法習得』大修館書店。
- 板東美智子・松村宏美（2001）「心理動詞と心理形容詞」影山太郎（編）『日英語対象動詞の意味と構文』pp.69-97, 大修館書店。
- 益岡隆志・田窪行則（1987）『日本語文法セルフ・マスターシリーズ 3 格助詞』くろしお出版。
- 益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 一改訂版—』くろしお出版。
- 三原健一（2000）「日本語心理動詞の適切な扱いに向けて」『日本語科学』8,pp.54-75.
- 森田良行（2002）『日本語文法の発想』ひつじ書房。
- 森田良行（2005）『外国人の誤用から分かる日本語の問題』明治書院。
- 森田良行（2007）『助詞・助動詞の辞典』東京堂出版。
- 山岡政紀（2000）『日本語の述語と文機能』くろしお出版。
- 山岡政紀（2002）「感情描写動詞の語彙と文法的特徴」『日本語日本文学』12,pp.23-54.
- 吉永尚（1997）「心理動詞の意味規定とその特性について」『日本語・日本文化研究』7, pp.57-76.
- 吉永尚（1998）「心理動詞の意味的統語的観察」『日本語・日本文化研究』8,pp.81-98.
- 吉永尚（2008）『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院。
- 张斌（主編）（2010）『现代汉语描写语法』商务印书馆。
- 荒川清秀（2008）「“知道”“了解”“爱”：引起状态动词转换的词语搭配和结构」『中国語学』255, pp 234-239.
- 刘月华・潘文娉・故韡（2011）『实用现代汉语语法（增订本）』商务印书馆。
- 朱德熙（1982）『语法讲义』商务印书馆。
- 于康（2014）『日语偏误研究的方法与实践』浙江工商大学出版社。